

フルブライト語学アシスタントプログラム (FLTA)

2022年度 参加者レポート

川原瞳 Spelman College, Atlanta, GA

中間レポート

ジョージア州アトランタのスペルマン大学に派遣されている川原瞳です。当大学は女子学生のみで構成される四年制大学で、アフリカ系アメリカ人が高等教育を受けるために設立された HBCU (Historically Black Colleges and Universities) のひとつです。米国内ナンバーワン HBCU として名高いこの大学に、2022年度は日本、台湾、ブラジル、フランスから1名ずつ FLTA が派遣されています。

応募～派遣まで

応募・選考プロセス

2021年7月、当時大学院の修士課程2年だった私は、米国文化を直に経験するという夢を叶えるべく留学プログラムを探していました。そんな中、次年度 FLTA 募集開始のお知らせメールを受信し、米国文化にも英語にも英語教育にも強い興味があった私にとってこのプログラムは最適である、と応募を決意しました。そこからは8月末の応募締め切りに向け大急ぎでエッセイの執筆、推薦状の依頼、成績証明書の取得などを行いました。その後は9月末頃にオンラインでの面接、10月半ば頃に日本における選考通過、翌年3月頃、派遣を希望する大学をリスト内から回答、といった流れでした。そして2022年4月末頃、スペルマン大学への派遣内定をお知らせいただきました。周囲と比べて直近の将来が不明瞭な状態が長くかなり不安を感じましたが、自身の決断は正しかったと、スペルマン大学で半年以上過ごした今、胸を張って言えます。

渡米前 FLTA オリエンテーション

パンデミック前は大学派遣前に米国にて対面のオリエンテーションが数日間行われていたようですが、今年もオンラインでの開催となりました。オリエンテーションでは約2週間の間、毎日数時間ずつ自主学習するセッションと、ウェブ会議上でのライブセッションとが繰り返されました。内容としては、渡米準備から入国後の手続き、異文化理解、ハラスメント対策や言語の教授法、学習管理システムの活用法などについて教授いただきました。

渡米から新学期開始まで

私は2022年8月4日に羽田国際空港からシカゴ経由でアトランタへと到着しました。新学期開始の8月12日まではスーパーバイザー、他国の FLTA と共に携帯電話の契約や食料の買い出し、銀行口座の開設など行いました。スーパーバイザーが家族のように迎えてくださったため、到着後は何一つ心配なく過ごすことができ本当にありがたかったです。

TA としての仕事

スペルマン大学では教授が28年に渡り日本語プログラムを担当されており、日本語の授業は毎年かなり人気があります。私は TA として日本語初級・中級クラス (各々20名ほど)、日本と中国のビジネス・カルチャーのクラス (10名) に参加しました。

日本語初級クラス (週3回各50分)

語学クラスでの私の役割は、教授が文法や語彙を説明する際の資料の提示、日本語や文化に関する補助的な説明や板書、教授が不在の際の代講、課題のチェックなどです。初級クラスは大半が1年生または2年生でした。学生の多くは日本語と日本文化に興味津々で初回からエネルギーに溢れており、私自身学生から元気を貰えるようでした。授業では語彙や文法等について積極的に質問があり、文字から文法から全て異なる言語を一生懸命学ぶ学生の姿を見て、日本語話者として嬉しく思いました。毎回の授業では、文法の複雑さに挫けて



日本語初級クラスの教授と学生たち

しまうことがないように、教授が口頭で説明した事項を色分け、図解して板書するなど工夫しました。また、クラスに来やすい雰囲気を作れるよう、学生たちとのポジティブなコミュニケーションを心がけました。

日本語中級クラス (週3回各50分)

中級クラスは初級クラスから連続したクラスで、主に2年生以上の学生が受講していました。しかし初級クラスとは打って変わって学生間の習熟度にかかなりの差が開いており、遅れをとっている学生はクラスを休みがちで参加していても教室の隅の方で暗い顔をして黙って座っている姿がよく見られました。ひらがな、カタカナを認識できない学生も一定数いたため、後述の Tutoring Hours でなるべく丁寧に、勇気づけながら指導するよう務めました。言語が分からない、勉強についていけない無力感を一部の学生からひしひしと感じましたが、 Semester が終わる頃には当初の無力感を克服し確実に語学力を伸ばしてゆく学生の姿が見られるようになりました。

日本・中国のビジネスカルチャー (週1回150分)

文化の授業では、秋学期の前半は日本のビジネス・カルチャーについて、後半は中国のビジネス・カルチャーについて教授が講義されました。毎週学生たちとディスカッションを行う中で、私自身のなかに所与のものとして根付く日本文化を相対化する良い機会となりました。

Tutoring Hours (週2回各60分)

こちらは語学クラスの学生向けに補修を行う時間で、学生が必要な時に自由に FLTA オフィスにやってくるという形式をとっています。普通のクラスは20名越えのため、全員が完璧に理解することは不可能です。このため、遅れを感じている学生を支援する上で Tutoring Hours は不可欠な時間となりました。また、学生と一対一で話をしたりなどコミュニケーションの場としても大切な機会となりました。

Japan Club

Japan Club は、日本でいう大学の同好会のようなものです。スペルマン大学の学生が長を務め、近隣の大学の学生も多く加入しているこの人気クラブに、私もスーパーバイザーとして参加しています。活動内容としては、月1・2回大学内で集まって日本文化を学んだり、クイズやゲームを行ったり、アニメ鑑賞をしたりといったものです。秋学期には目玉イベントとして Cosplay Competition が行われ、投票で最もクリエイティブなコスプレイヤーは誰か決定しました。しかし順位にかかわらず創意工夫を凝らしたコスプレはどれも輝いて見えました。遠く離れたこの地で、日本文化に熱中してくれている人がいることをありがたく思います。



Cosplay Competition 受賞者

学生として聴講した授業

秋学期は以下の2つの授業を聴講しました。

1. Survey of African American Music

音楽学部開講のコースです。授業では、週3回各50分ずつ、教授がアフリカ系アメリカ人音楽の歴史や特徴を解説していく形で進められました。私自身、高校時代にゴスペルを扱った『天使にラブ・ソングを』劇中歌を歌った経験があったため、アフリカン・アメリカン音楽がどのようにして生まれ、発展していったのか、その起源から辿ることができ大変興味深かったです。

2. African Diaspora and the World

スペルマン大学の一年生にとって必修のコースです。アフリカ大陸やアフリカン・アメリカンの歴史を辿るのみならず、客観的で分析的なものの見方、文章の書き方、意見の述べ方など学問を読み解く上でベースとなるスキルを身につけていくことができます。この授業では学生たちのアフリカン・アメリカンとしてのアイデンティティを深掘りすることが多く、日本で生まれ育った私にとって、人種とは、民族とは、アイデンティティとはと初めて深く考えさせられました。また、授業では一人ひとりの発言が尊重されるような雰囲気づくりがなされており、毎回学生たちが自分の意見や経験を熱く語る姿に感銘を受けました。

FLTA Mid-Year Conference

11月半ば、ワシントン D.C. にて FLTA の中間会議が行われ、約400名の FLTA が参加しました。会議では毎日語学教授法や帰国に向けた準備に関するレクチャーやワークショップ

が実施されました。各国の FLTA の英語力はほぼネイティブレベルで衝撃を受けると共に、私自身英語を学習する上での大きな励みとなりました。夕食時には台湾からの FLTA が積極的に夕飯に誘ってくれ、当然のように暖かく日本人を受け入れてくれる姿に感動を覚えました。英語を学ぶ本当の意義は、生まれた国や文化が異なる人々と同じ時を分かち合い友人となれることである、ということに改めて実感しました。



台湾からの FLTA とともに

アトランタでの生活

気候について

アトランタの気候は全体的に日本と似ていますが、渡米後すぐに経験した湿度の高さや毎晩起こる雷雨には少し驚きました。また、10月末くらいまで比較的夏のような日々が続き、12月になってもコートを着込むような日は少ない…かと思えば数日程氷点下の日もあったので、寒暖差で体調を崩さぬよう注意が必要です。

キャンパスでの暮らし

キャンパス内では警察の方が 24 時間パトロールしており安心して過ごせます。食事に関しては、FLTA は学生同様、長期休み以外は学食でビュッフェ形式の食事を提供してもらっています。キャンパス内のジムも、日々の疲れや運動不足の解消に活用させていただいています。また、教室から徒歩 5 分ほどのキャンパス内の寮の一部に無料で住まわせていただいております。4 人の FLTA は隣同士で生活しており、時折互いの部屋でパーティーをしたり、困ったときに助け合ったりしています。

アトランタという街について

キャンパスの周囲、West End はあまり治安が良くなく、一人で歩くことは滅多にありません。徒歩 15 分ほどの場所に地下鉄の駅もありますがこちらもあまり安全ではないため、遊

びに出るにはいつも Uber と Lyft (配車サービス) を利用しています。このような少し危険な面がある一方で、アトランタには Southern Hospitality という、訪れる人々を暖かくもてなし親切にする米国南部共通の文化が定着しています。駅や道で困っていると必ず誰か声をかけてくれたり、現金がなくコンサート会場に入れない時にコッソリ代わりに払ってくれたり、など見返りを求めない、人々のおおらかな優しさを感じる機会がとても多いです。もちろん全ての人を信頼してしまうと危険なので注意を払うようにしていますが、今までにアトランタの人々から差別されたり嫌な思いをしたことはありません。おおらかかつ大胆なアトランタの雰囲気はとても心地よく感じます。

最終レポート

スペルマンでの勤務を終え、はや 2 ヶ月半が経過しました。日本での暮らしが完全に「日常」となり、米国でのあの日々は私の白昼夢だったのではないかとさえ思います。振り返ってみると、プログラムへの参加は私にとって人生最大の冒険であり、語学教師としての経験を積むとともに、ひとりの人間としても大きく成長することができました。

TA としての仕事

春学期になって多少学生の入替わりはあったものの、基本的に授業の形式や雰囲気は秋学期からそのまま引き継がれました。教授が多忙な際に私が代理で授業を行うことも増えましたが、学生と打ち解けてきたこと、大人数を前に喋ることに慣れてきたことから、リラックスして授業を進めることができました。秋学期は中級クラス内で学生の習熟度によって授業態度に大きく違いがありましたが、春学期は多くの学生が真剣に授業に取り組むようになっていました。卒業を控えた学生が多かったため、グッと身が入ったのかもしれませんが、対して、学生間に大きなレベルの差が見られなかった初級クラスでは、春学期になると複雑な文法に苦戦する学生が増えてきました。このため、春学期は教授のスタイルをなるべく真似て、とにかく習った表現や単語を使わせる、口に出してもらおうというアクティブな方法を積極的に実践しました。また、秋に引き続き、理解に遅れをとっている学生にはなるべく寄り添い、授業前後での声かけや Tutoring Hour での丁寧な個別指導を心がけました。初級中級と 2 年間同じ学生たちを見守れないことが残念ですが、今年の秋に新たに初級クラスを受講する学生も、中級に進む学生も、楽しみながら日本語を学んでほしいと思います。

桜祭り 2023

スペルマン大学では、毎年日本語の教授と TA が主体となって「桜祭り (Cherry Blossom Festival)」を開催しています。

桜祭りは1日を通して学内の人に日本文化を楽しんでもらうことを目的としています。今年は折り紙、書道、浴衣の着付け、アニメに関する講義、J (Japanese) ファッションショー、アイドルパフォーマンスを行いました。特に折り紙が大きな盛り上がりを見せ、学生は皆ベーシックな「つる」に加えて自分の折りたいものをネット上で見つけ、作品づくりに熱中していました。Jファッションショーではロリータやパンク、制服など学



折り紙に熱中する学生たち



Jファッションショー

生が思い思いに日本のファッションを身につけランウェイを歩きました。参加者のほとんどが衣装を手作りしており、堂々とした着こなしが煌びやかでとても綺麗でした。

冬休み・春休み旅行記

春学期開始前には、約1ヶ月の長い冬休みが与えられました。私は年末年始にニューヨーク中を探検し、その後フロリダのディズニーワールドに行きました。3月中旬頃にも1週間程度の休みがあり、マイアミ、キーウエストの美しいビーチや国立公園を訪れました。物価や宿泊費が高騰しておりかなりの出費でしたが、日本にはないものをたくさん見て経験できたため、思い切って長旅をしてよかったと思います。

冬休みは台湾人 FLTA たちと、春休みはアトランタで知り合ったインド人学生と長い時間を過ごしましたが、それぞれの国民性のようなもの、文化によって根付いた習慣などが垣間見え興味深かったです。台湾の友人もインドの友人もエネルギーに溢れていて、あれをしよう、これをしようというアイデアが次々と浮かび決断も早く、人生を最大限楽しむ術を知っているように見えました。何かしらのトラブルがあっても動じず、終始ゴキゲンなムードで素敵だと思いました。



夜のマイアミ South Beach にて

アトランタとの別れ

2023年5月、9ヶ月間の留学生活が終わりを迎えました。帰国の1、2週間前はちょうど学期末で最終授業や試験や課題の採点など慌ただしい日々が続きました。学生の中には最後の日に似顔絵や手書きのメッセージ、プレゼントなどを用意してくれた子もいて、ありがたいと思うと同時に、離れるのがとても寂しく感じました。学生のほかにも、送別会を開き美味しい郷土料理をご馳走してくれたインド人の友人たち、夜遅くに空港まで車を出してくれた学部秘書さん、最後まで親族のようにお世話してくださったアドバイザーの教授…全くの他

人かつ外国人の私を優しく受け入れてくれた全ての人々に感謝しています。



アトランタのランドマーク Piedmont Park にて

日本に帰ってきて

5月14日、シカゴを経由した合計16時間以上のフライトを終え、日本に到着しました。帰国後最初に思ったことは、多くの人が言う通り、ご飯が美味しい、清潔、安全ということです。また、コンビニもスーパーもドラッグストアもこんなに便利なものだったのか…と感動しました。医療費も安く、本当に暮らしやすい国であると実感しています。また、帰国前と比べ、もっと夏祭りやお月見などの季節行事を楽しんだり、まだ訪れたことのない地元や日本の美しい場所を開拓したりしたいと思うようになったのは、面白い変化だと思います。

最後に

2021年夏にFLTAプログラムに応募したとき、そして2022年夏に渡米するとき、英語や言語教授テクニックの上達だけでなく、米国で多くの人と出会い、自身のものの見方を多様化させることを目標としていました。今の自分と1年前の自分を比較すると、私はその目標を達成したと感じています。自分の普段生きている世界の外側は思ったよりずっと広いこと、国や文化に関わらず心の温かい人々がたくさんいること、人の数だけ生き方があり「こうでなければ」と何かに囚われる必要がないこと…その他にもたくさんのレッスンを、9ヶ月という短い期間で学びました。留学生活の全てが順風満帆で何から何までサイコーだった!とは残念ながら言えません。個人的な葛藤はありましたが、もっとこんなふうを楽しめたかも、こうすれば良かったかもということはたくさんあります。けれど、米国で得た、人間として大切な教訓、色鮮やかな世界観はそれらを打ち消すほどの「儲けもん」であると言えます。また、向こうで出会った友人のことを思うと、私には世界中に応援して

くれる人がいるのだと、力が湧いてきます。

中間レポートでも触れましたが、英語は背景の異なる人々を繋ぐ架け橋となります。日本で英語を学ぶ人々が、言語を習得していく喜び、人と通じ合う喜びを感じられるよう、今回FLTAプログラムで磨いたスキルと経験を存分に活かしていきたいと思います。最後に、私に素晴らしい経験をさせてくださったFLTAプログラムに関わる全ての方々から心から感謝申し上げたいと思うと共に、本プログラムにもっと多くの日本人の先生が参加され、日本の英語教育がパワーアップしていくことを強く願っています。

フルブライト語学アシスタントプログラム (FLTA)

2022年度 参加者レポート

大野直子 Northwest College, Powell, WY

中間レポート

朝起きると、いつも私の住んでいる Intercultural house の他の部屋から、ラテン系の楽しい音楽や、ロシア系のロマンチックな音楽が聞こえてきます。一緒に住んでいるメキシコ人の FLTA の先生や、トルクメニスタンからの留学生の Residence assistant の学生さんが聞いている音楽です。外は -20 度を超えているのですが、晴れた日は青空に雪がキラキラ輝いて見えます。目が覚めると今日もいいことがありそうで、嬉しくなります。

私のいる Northwest College は、ワイオミング州パウエルという小さな町にあるコミュニティカレッジです。私が行っている授業のことや、自分の受けている授業、生活について、ご紹介します。



Northwest College
の授業初日に

自分の行っている授業について

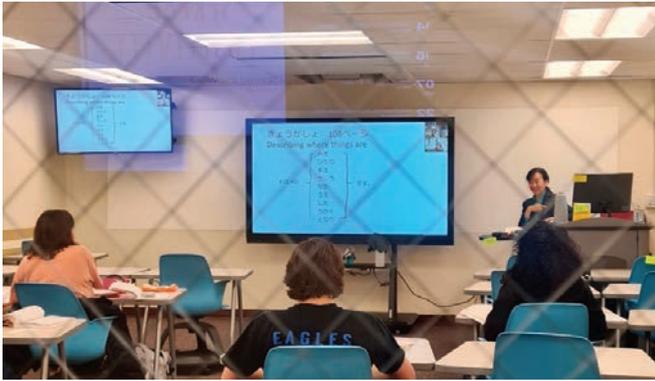
私は、全く初めて日本語を学習する学生さん向けの 1010 というクラスと、1 セメスター日本語を学んだ学生さん向けの 1020 というクラスを、Main teacher として担当しています。それぞれ月～木の 4 日間、50 分の授業があり、週 8 コマ教えます。

また、私の日本語のクラスは、モンタナ州ビルングスにあるモンタナ州立大学と Zoom でつないで授業を行っており、各セメスター 20 人弱の学生さんがいます。渡米前に「英語が話せる人は、もともと世界で使える言語である英語ができる

ため、それ以外の言語をそこまで熱心に学ばない」と聞いていたのですが、私の授業を受講している学生さんたちについていえば全く当てはまらず、どの学生さんも本当に熱心です。無断欠席もなく、毎日笑顔で「なおこ先生、こんにちは」と教室にやってきます。宿題以外にも、ひらがなやカタカナを覚えようと自分で繰り返し練習したノートや、手作りのフラッシュカードを見せてくれたりします。アニメで聞いた言葉をノートに取り「先生、お兄さんと『アニキ』はどう違うんですか?」といった、ゆかいな質問を持ってくる学生さんもいます。

授業はできるだけ皆さんの興味や関心に合うように、最初にみんなの好きな日本のものを聞き、文化や歴史、日常生活の話もたくさん盛り込みます。レベルが上がってくると、漢字や助詞、動詞の変化等、難しく感じるようですが、ゲームを取り入れたり、漢字の起源を話したりして、どうやったら楽しくできるか毎日考えながら授業を作っています。全て自分の裁量に任せていただいているので、やりがいがあります。学生さんが授業の後「面白かった!」「今日はよくわかったよ」と言ってくると、また次の工夫を考えたくくなります。

Northwest College では、5 月に希望者で日本への研修旅行を行うことになっています。また、モンタナ州立大学は、日本への 1 年留学に応募できるようになっているようです。研修旅行に行きたいとアルバイトをしてお金をためている学生さんや、1 年留学のために、推薦状を書いてほしいと頼んでくる学生さんもいます。研修旅行を引率される私のアドバイザーの先生でさえ、ご自身の授業の合間を縫って私の授業を受講され、テストに向けて一生懸命勉強されています。そんなに日本を愛してくれて、英語とは文字も言語構造も大きく違う、決して簡単ではない言語を学んでくださっていることに感謝の気持ちでいっぱいになります。この大学は留学生も多く、日本からの留学生もいます。彼らも日本語の授業に遊びにきて、会話のお手本係を務めてくれたり、机間をまわり、アドバイスをしてくれたりします。教室外でもカフェテリアで一緒にご飯を食べたり、スポーツをしたりしながら日本語で話している様子も見ます。そのおかげもあり、日本語の学生さんたちは、短期間なのに妙にこなれた受け答えを披露してくれ、その上達の素晴らしさに胸が熱くなります。先日、雪嵐で授業が全て休講になりました。もちろん、日ごろやり残している仕事ができるわけなのですが、実はその日はすてきなみなさんに会えないため、ちょっとつまらない気持ちになりました。



授業の様子（メキシコのFLTAの先生がこっそり撮ってくれました!）



秋セメスター最終回に記念撮影

授業の他に、日本語クラブを月に1～2回行っています。セメスターのはじめのクラブフェアで参加者を募集し、部長、副部長、連絡係を決めました。その後、何をしたいか話し合いをし、いろいろな活動を行っています。人気があるのは日本語のアニメを見て、簡単な日本のご飯を作って食べる会です。一緒にご飯を作り、日本語のアニメの名セリフを紹介し、セリフを皆で練習してから、アニメを見ます。また、地域の図書館で子どもたち向けに日本の絵本を英語で解説を加えながら読み聞かせをし、折り紙を教える会をしたのですが、その際も日本語クラブの学生さんたちと一緒に行いました。この日本語クラブにはアメリカの学生さんだけでなく、留学生たちも参加してくれます。様々なバックグラウンドの学生さんが仲良くおしゃべりをして、いろいろな言語を教えあっている様子を見ると、なんだか胸がいっぱいになります。ここにいる皆さんが、いつまでも仲良しでいられますように、世界が平和でありますようにと、寝る前にお祈りせずにはいられなくなりました。

受講している授業について

秋セメスターはアメリカの文化についての授業として、North American Indian Cultureの授業と、Educational Psychologyの授業を取りました。Educational Psychologyは、自分の日本の大学院の専攻とも重なる部分があり、興味深く参加できました。ディスカッションやプロジェクト的な活動が多いので、必ず発言をするようにしました。私の英語は怪

しいものですが、とてもあたたかい先生で、いつもほめて自信を持たせてくださいました。自分の授業でも学生さんをたくさんほめて自信を持ってもらわないといけなさと実感させられました。North American Indian Cultureは、アメリカの地理などの背景知識が全くない中での授業だったので、パソコンを持っていき、わからないときはその都度調べるようにしました。小テストとレポートがたくさんあり、それは大変でした。けれども、最後に自分が関心を持ったテーマについてプレゼンをし、さらにそれを小論文にまとめて提出するという課題については、自分自身の専攻でのテーマに結び付けて考えることができ、とても興味深く取り組みました。わからないときは先生に質問に行くと、とても親切に教えてくださいます。この大学は先生との距離が近く、どの先生もとても親切です。また、同じフルブライトのFLTAのメキシコ人の先生が、私のレポートを読んで修正をしてくれました。文章に自信がないときは、図書館でアドバイスをしてくれるサービスも利用しました。おかげで、2教科ともよい成績をいただくことができました。

春セメスターは、自分の大学院での専攻分野ともかかわるGeneral Psychologyと、日本の研修旅行参加者のための事前準備のクラスを受講しています。

生活について

冒頭に書いたように、私は大学と道を挟んで向かい側にある、大学の施設「Intercultural house」に、メキシコ人のFLTAの先生、トルクメニスタンからの留学生のRAさんと3人で楽しく暮らしています。週末は3人でおやつを食べながら映画を見て、女子トークをすることもあります。今年から、我々FLTAは2人になったようです。私はいつもメキシコ人の先生にいろいろ相談できるので本当に心強いです。大学までは道路を渡るだけで行けるのでとても便利です。食事は大学のカフェテリアで、支給されているミールプランを使って食べるか、自分で簡単な食事を作っています。

私は最低限の衣類や身の回りのものしか持ってこなかったのですが、この大学には寄付が置かれている部屋があり、そこで中古の洋服や、食品などをもらえます。私もあたたかい洋服や、部屋のラグなどいただきました。そして、持ってきた服でサイズが合わない服は寄付しました。



地域の図書館で日本の絵本の読み聞かせ

この地域は、夏は空気がさらりとして気持ちが良いのですが、11月ぐらいから雪が降り始め、12月ごろから厳しい寒さになります。けれども、大学内や住居内はとても温かく快適なので、いまのところ困ったことはなく、水が合うのかとても健康に過ごしています。時差がちょうどよいため、昼間はこちらの授業を行いながら、日本の大学院の授業にも、夜中にZoomを使って出席することができました。

パウエルは小さな町なのですが、その良さもたくさんあり、スーパーマーケットや、ダウンタウンにあるお店などには歩いて行けます。とても治安が良いので、通りすぎる人が「Hi!」と声をかけてくれます。ただ、大きなお店や劇場等に行くには、車で40分ほどのCodyという町まで行かなければならず、どなたかに車に乗せていただくことになるので、その点は不便なのかもしれません。(私は小さな町で歩き生活というのは好きなので、あまり困らないのですが。)

私はここへ来るまではワイオミング州がどのようなところか、全く知りませんでした。けれども、自然豊かで空気がよく、先生方も学生さんも地域の皆さんも穏やかで心優しい人たちがばかりの素敵な地域です。ドラえもん「どこでもドア」さえあれば、東京の家と交互に住みたいです。大学だけではなく、町で行われているイベントにも積極的に参加していますが「Northwest Collegeで日本語を教えています。」と自己紹介をすると、皆さん親切にしてくださり、その後会っても「寒いけど、雪のブーツはある?」「買い物に行きたいなら車を出そうか?」と声をかけてくださるのです。顧みて、私が日本にいるときに、海外から来た人に対してこんな風に親切にできていたのだろうかと反省します。私は約30年の教育系の企業経験を経て大学院に入学し、博士課程の1年目でこのプログラムに参加させていただきました。50歳を過ぎた今、全くこれまでになかった経験を、ここへ来なければ会えなかったすてきな皆さんとのめぐりあいを頂きました。そのことに感謝しながら、残された数か月、たくさんものを吸収し、そして日本語を学ぶ学生さんたちに、なにかを伝えていけたらいいなと感じています。



日本語クラブのみんなと

帰国して2か月。帰国した次の日から大学院に戻り、あっという間に日本の生活に戻りました。ふと、「私は本当にアメリカにいたのかなあ」と思うことがあります。けれども、インスタグラムからは、日本語クラスの学生さんたちや、世界中のFLTAの先生、大学の先生方の元気な様子が伝わってきます。「なおこせんせい、日本はあついですか。お元気ですか?」と、学生さんから日本語でメッセージが届くこともあります。そんな時、ああ、確かに私はアメリカに行っていたんだ、と思います。私のNorthwest Collegeでの生活を、振り返りたいと思います。

2023年春セメスターの日本語クラス

2023年春セメスターは、全く日本語が初めての人向けの1010、そして2022年秋セメスターから継続して学習する1020のクラスをMain teacherとして担当しました。Northwest Collegeと、モンタナ州立大学ビルリクスをオンラインでつないでのハイブリッド授業です。さらに、2022年秋セメスターに1020のクラスを学習した学生さんが「せっかここまで勉強してきたので、残りのテキストも続けて勉強したい」と申し出てくれたため、火曜日のオフィスパワーの2時間を使って教えました。「もう正規のクラスではないので、単位は出ないよ」と話しましたが、毎週ワークブックを欠かさず学習し、チャプターの終わりには確認テストを受け、いいスコアを取ります。ずっと私と1対1ではコミュニケーションの幅が広がらないかなと考え、日本から来ている留学生のみなさんに声をかけたところ、毎時間誰かが参加してくれ、音読や会話練習を一緒にしてくれました。

春めいてきた時期には、教室の中だけではなく、大学のテラスで授業をしました。「この」「その」「あの」という言葉も、「この家」「あの木」「その車」と、自然豊かな環境の中で学ぶことができました。モンタナ州立大学ビルリクスにいらっしゃる、Japan Outreach Initiative コーディネーターの日本人の先生にお願いしてNorthwest Collegeにお越しいただき、書道や茶道について体験する授業をしていただくこともできました。地元でいらっしゃる日本人の方に来ていただいて、経営されているオーツ工場の話をしていただいたり、日本にいる大学院の友達がオンラインで参加してくれたりしたので、生きた日本語に触れる機会を作ることができました。そのような機会があるたび、学生さんたちは、授業で覚えた自己紹介に、新しい情報を付け加え、「わたしは、野球が好きです、おおたにしょうへいさん、大好きです!」と身振り手振り、一生懸命話をしていました。私のクラスでは、間違いやわからないことは大歓迎、覚えたことをとにかく使うように伝えました。そして、一人ひとりの学生さんたちのいいところを毎日必ずノートに取り、どこがよくなってきたのかを具体的に伝えるように

しました。実際頑張り屋さんのすばらしい学生さんたちばかりだったので、ノートはすぐにいっぱいになりました。

春semesterも盛んに日本語クラブの活動を行いました。お鍋やカレーライス、おにぎりを一緒に作り、かるた取りなどの日本のゲームをしたり、アニメを見たりしながら食べました。ほぼ食べ終わったところに「ちょっと遅れたけど来ました！」と駆け付ける学生さんたちもおり、ありあわせのものでまた追加の食べ物を作るという具合でしたが、皆でする後片付けさえも楽しかったです。町の図書館では、大人向けのおりがみワークショップ、学生さん対象の浴衣を着る会もしました。浴衣を着た学生さんたちはかわいいポーズをとり、何百枚もすてきな写真をとっていて、着つけた私は、成人式の娘を持つお母さんのような、あたたかな気持ちになりました。

日本語や日本への興味を持ってくれたおかげで、私のクラスから、日本への1年の交換留学に応募し、来日が決まった学生さんが2人、結果待ちの人が1人います。5月中旬から行われた1週間の日本旅行に参加した学生さんは6人いました。日本語を始めたことで自信や夢を育み、彼らの未来が国境を越えて広がっていく様子を目の当たりにしながら、短い間でもその過程に携われたことがとても幸せでした。



春semesterのおわりに、日本語クラスのみんなど記念撮影



書道 JOI コーディネーターの先生にお越しいただき、書道体験をしました。

春semesterに受講した授業

春semesterは、General Psychology のクラスと、日本の研修旅行参加者のための事前準備クラスに参加しました。

General Psychology は、秋semesterの間にお友達から情報収集をし、「先生のお話が面白くてわかりやすかった!」と好評の授業です。前評判通りの楽しい授業で、テストの設問さえもユーモアがきいていて、私の授業もこうでなければ、と感じさせられました。日本の研修旅行のための事前準備クラスは、私は受講生として参加しているのですが、日本語の挨拶や、お買い物練習などのパートは私が担当したり、Suica の使い方についての実際をレクチャーしたりしました。この授業に参加している皆さんで5月中旬からの日本への研修旅行に一緒に行ったのですが、事前準備の間にお互いを興味や関心を知ることができ、毎週授業とは思えない楽しい時間でした。



研修旅行中、日本の大学の授業に、日本語クラスの生徒さんと一緒に参加しました。

冬から春への生活

Wyoming 州 Powell は、とても厳しく長い冬がきます。-20度以下の日さえありました。外に出ると鼻の中が凍ってパリパリしました。ただ、湿度が低いので粉雪が少し積もるぐらいだったことと、住んでいた Intercultural House と、私が授業をする建物は、道を一本わたるだけだったので、外に出なければ快適でした。少し遠くまで買い物に行きたいときは先生方や知り合いの方が車に乗せてくださいました。

私の大学では、FLTA は先生でありながら留学生でもあるという扱いになっていたの、留学生の催しにも声をかけていただけました。東ティモールや、パキスタンなど、いろいろな国から来た留学生の作る料理を食べながら文化についてのプレゼンを聞いたり、ムスリムの皆さんのラマダン明けのパーティにも入れてもらいました。運動音痴だというのに、日帰りのスキーツアーにも行きました。冬場には地元の博物館で手芸好きの方が、それぞれ手掛けている作品を持ちよって、お菓子を食べて一緒に作るという会があります。大学の手芸好きの先生と誘い合って参加しました。金曜の朝は地元の図書館で、Cribbage というカウボーイに伝わるトランプゲームをしていると図書館のチラシで知り、地元の年配の紳士の皆さんに教えてもらいました。週末の夜には地域の市民センターでどんな年齢の人でも参加できるボードゲームの会があり

ます。この会ではこれまで知らなかったボードゲームを知れて、うれしかったのですが、中学生の男の子たちにてんぱんにされました。豪華なレストラン、劇場やアミューズメント施設があるわけではありませんでしたが、地元の皆さんと一緒に楽しく過ごせたことは、何よりもかえがたい経験でした。どこに行ってもあたたかく迎えていただき、外国人で、英語も上手ではないからと、さみしい思いをするようなことは、一度もありませんでした。私自身も、つたない英語でも笑顔でどんどん話しかけ、日本のことを伝えました。それまで、海外の人のみならず、あまり知らない人に「急に話しかけたら変かな」と、気軽に声をできることができなかった自分を深く反省しました。毎日楽しく、充実して笑顔で過ごし、私にアドバイスを下さる方はどの方も明るく前向きだったおかげで、体調が悪くなることや、人間関係で嫌な思いをすることも一度もありませんでした。「笑う門には福来る」という日本のことわざは、全くその通りだと、アメリカの空の下で感じたのでした。

何よりありがたかったのは、同じ大学にメキシコからの FLTA、カーラ先生がいてくれたことでした。私たちは同じ Intercultural House に住み、大学のオフィスも隣でした。わからないことや困ったことがあるとなんでも相談しました。いつも笑顔で、彼女の部屋から元気な歌声や笑い声が聞こえてきて、聞いているだけでもうれしくなりました。私が行く Japanese Club や図書館で行う Culture Event もいつも協力してくれました。私も彼女の行う Spanish Club の活動に参加し、おいしい料理や季節のイベントを体験できました。私の誕生日がくると、日付が変わった 12 時に一緒に住んでいるトルクメニスタンの留学生さんと祝ってくれ、さらにその日の授業が終わった後、アドバイザーの先生方や日本語の学生さんにもこっそり声をかけて集まり、サプライズパーティをしてくれました。こんな誕生日は生まれて初めてで、あまりにうれしくて泣きました。カーラ先生は私よりずっと若いのに堂々としていて、自分の担当する授業にも、受講する授業も全力投球で、同じ FLTA として、いつも誇らしい気持ちでした。



メキシコからの FLTA のカーラ先生と一緒に。本当にありがとう！

彼女がいてくれたおかげで、私は一度たりとも後ろ向きになることはありませんでした。

そんな具合だったので、帰国するのが本当に悲しかったです。去る日に号泣するだろうことがわかっていたため、帰国日を変更して、大学主催の日本への研修旅行一行と共に日本に帰ることに決めました。研修旅行に参加し、私の家や大学を案内できたら楽しいなと考えたからです。研修旅行に参加する学生さんや先生方とはウキウキで「楽しみだね」と話し合っていたのですが、これで一旦さようならになるカーラ先生やお友達、学生のみなさんとは抱き合っ、涙のお別れになりました。でも！きっとまた会おうと誓い合いました。

これから FLTA に挑戦する方へ！

FLTA としての 10 か月は、私にとって、55 年間の人生が変わるようなすばらしい体験でした。私の力で行うことができたことなどは本当にわずかで、学生さんたちや先生方、町の皆さん、全ての方々の優しさ、温かさのおかげです。感謝しかありません。アメリカ滞在は 10 か月あるので、私はもちろん努力はするものの、決して無理をしすぎないことにしていました。うまく通じなかったり、聞き取りづらかったりしたら「私は日本語の先生なので、決して英語が上手じゃないです、みんなわかりやすく話してください！」と遠慮せず言いました。授業のことや大学のシステムがわからないときは、先生方やスタッフの方に何度でも質問に行き、自信がないときは「私はこのように理解をしたけど、この理解で OK ですか？」と確認しました。また、カーラ先生はじめ、日本からの FLTA の皆さん、そして、世界中から来た FLTA の皆さんとご縁を頂けたことも、素晴らしいことの一つでした。今も、Instagram で近況を確認して、皆さんが世界中で活躍されている様子に「私も負けられないようにがんばろう！」と刺激を受けます。このプログラムに参加しなければ、巡り合えないすばらしい方にたくさん出会えます。多くの人に FLTA という経験をしていただき、新しい言語を学んで、その言葉でコミュニケーションを取れる楽しさを、伝えていただきたいなと思います。FLTA の 10 か月、思い切り楽しんでください！



日本語の楽しさや日本の文化のすばらしさを、ぜひ伝えてください！

フルブライト語学アシスタントプログラム (FLTA)

2022 年度 参加者レポート

大城孔士 Casper College, Casper, WY

中間レポート

2022-2023 年度に FLTA としてワイオミング州 Casper College に派遣されています、大城 孔士です。私はこの Program への参加が決まるまで、モチベーションを高めるため、これまでの参加者レポートを何度も読み返しました。そのレポートを今、自分がまとめているということに、なんとも形容し難い感慨深さ、そしてあっという間に過ぎた時間の流れの速さを感じています。本レポートの内容が、これからの FLTA の皆さんにとって、少しでも役に立てば幸いです。

派遣先の大学について

Casper College は、イエローストーン国立公園が有名である Wyoming 州内最大の都市の一つである Casper (人口約 60,000 人) に位置しています。キャンパスはあまり大きくないですが、Wyoming 州には大学があまり多くないため、州内の至るところから学生が集まります。さらに地域に根付いた Community College ということで、大学周辺に住む高校生や 30 ~ 50 代、そして年配の方まで幅広い年齢層の方が学生として授業を履修します。そして学生の多くは Wyoming 州出身です。留学生の比率はかなり低く、学校全体で 100 名にも届きません。そしてその留学生の大半は学校の Athletics に所属するために入学しており、今年度は日本からも 3 名の学生が男子サッカーチームに所属していました。こうした背景もあり、留学生団体等は活発ではないですし、多様な価値観を体験するといったことはなかなか難しいです。その代わりに、地元で育っ



Campus

た学生から、彼らのバックグラウンドを学ぶには非常に適した環境と言えます。最後に、Casper College は過去にも多くの FLTA を受け入れてきました。そのため、FLTA の受け入れには非常に慣れている印象を受けました。生活面におけるストレスはほぼありませんでした。



Yellowstone National Park

Casper での生活について

Casper での生活について、まず特徴として挙げられるのが、その治安の良さと人の優しさです。アメリカとは思えないほどの治安の良さと人の優しさを体験することができます。治安に関して言えば、夜は出歩くことができますし、子どもだけで外出しているのを何度も見かけました。また shooting もほぼ起こらないと聞きました。加えて、Casper、そして Wyoming 州全体が車社会であるということも特徴の一つです。どこに行くにしても車が必要です。車がないことで不便に感じることも少なくありませんでした。参考までに、大学から最寄りのスーパーまでは徒歩で 15 分ほど、ダウンタウンへは徒歩で 20 分ほどかかります。空港までは車で 20 分ほどかかります。そのため、どこか遠方へ出かけたい、あるいは何かを買いたいという際には Supervisor や同僚に頼むことが多かったです。彼らはとても親切で、いつでも頼ってくれ、というふうに言ってくれ

るので、非常にありがたかったです。続いて寝食についてです。これまでに Casper College に派遣された方のほとんどが学生寮で他の学生と相部屋であったと聞きましたが、今年度は、大学の敷地内に建設されたアパート (IDK) の個室が支給されました。基本的な家具があらかじめ備えられているため、特に家具を持参する必要はないと感じました。また食事についてもミールプランが支給されます。これによって平日は朝昼晩、休日は昼晩の食事をカフェテリアで無料で摂ることができます。祝日や長期休暇、そして渡米直後はカフェテリアが閉まるので、自分で食事を用意する必要があります。最後に気候についてです。Casper は、年中強風が吹いており、非常に乾燥した地域です。雨はほとんど降りません。そして Casper は極寒の地です。降雪量は非常に多いです。今年度は 10 月頃から気温が下がり始め 11 月頃から雪が見られました。また 12 月には -28° を記録するなど日本にはまず体験することのできない気温を味わうことができます。



Downtown

TA の仕事内容・環境について

Casper College では、Primary Teacher として日本語の「初級」「中級」の 2 クラスを各週 4 コマずつ (計 8 コマ) 担当しています。課題の配布や成績の算出を行うには「Moodle」という学習管理システムを利用します。Casper College には日本語の授業を担当する教授が FLTA の他にいません。そのため、日本語授業に関する全ての仕事を一任されることとなります。大学からの指示は、「げんき」という教科書を使って欲しい、ということだけで、それ以外の指示は何もありません。ただ、Casper College の周辺に位置する公立高校には、日本語を指導されている先生がいらっしゃいます。幸いにも何かあればすぐ相談に乗っていただくことができました。次に、授業をする上での環境についてです。プリンターやスキャナー、プロジェクター等が完備されているので、授業を実施するにあたり、特に不便に感じることはありませんでした。文具等も支給してもらえるので、特にそういった日用品にこだわりがないのであれば、日本から持参する必要はないと感じました。最後に現地の学生

についてです。彼らは非常に素直で、真面目、そして学習に対して意欲的です。そのため非常に授業は行いやすいですし、日頃働くモチベーションとなってくれる存在です。

以上の背景から、教育に携わる人間として力を伸ばしたいという人にとって Casper College は非常に望ましい環境であると感じました。

応募に際して

私は、この FLTA Program に日本で勤めていた職場を休職して参加しています。私立校に勤務していたということもあり、応募に向けた休職の手続きは公立校と比べて比較的スムーズに進んだと思います。しかしながら、基本的に 2 年間に跨っての参加になるので、職場には校務分掌など調整をしてもらう必要があり、同僚の方々には大きな負担をかけることとなります。その点については職場と良く話し合いを重ねた上で退職、休職について検討すべきと感じました。

また参考程度ではありますが、私が応募した際の選考スケジュールも載せたいと思います。8 月末に必要書類の提出。9/13 に面接通知。9 月末に面接。10/17 Nomination。3/20 Matching 開始。4/27 派遣先内定。派遣先内定後は健康診断や VISA の取得申請等バタバタすることになります。あらかじめ忙しくなるというのは念頭に置いておいた方がいいかもしれません。健康診断については、私の場合は 50,000 円弱かかりました。英文健康診断書の作成は、最寄り駅の近くの内科にお願いしました。トラベルクリニック等と値段を比較してみてもいいかもしれません。

授業について

秋学期は、「Intro to Global studies」、「The foundation of Education」を受講しました。また事情もあり、年度の途中から「Public Speaking」という授業も受講しました。Casper College は他の大学に比べて学生の数が多くはないので、どの授業も比較的少人数での授業となります。Community College ということと他の大学と比べて授業のレベルは高くはないかもしれませんが、教授との距離も近く、発言もしやすい環境です。このことから自身の英語力を高めるといった点においては望ましい環境であると感じました。また、それぞれの授業ごとに特色が出ており、有意義なものとなりました。中でも印象的なのは、「Intro to Global studies」の授業で取り組んだ「Pod Cast」式の課題です。各グループにお題が課され、それについて議論し、その様子を録画し、編集、そして提出するというものです。少なくとも 30 分ほど録画をする必要があったので、その議論に向けての資料の収集、そこから自分の意見をまとめるのに苦勞しました。しかしながら、こうした苦勞こそありましたが、アメリカの学生と意見を交わすというのは私にとって

非常に良い経験になりました。またこの活動を通じて、自身の意見をはっきりと主張することがアメリカの学生にとっていかに当たり前に浸透しているのかというのを肌で感じることができました。

Fulbright Mid-Year Conference について



Mid-Year Conference で他国の FLTA と



Mid-Year Conference で日本の FLTA と

今年度の Mid-Year Conference は、11 月半ばに 4 泊 5 日で Washington D.C. で開催されました。コロナウイルスの影響もあり、コロナ禍前までは対面で実施されていた事前オリエンテーションはオンラインで行われました。そのため、全 FLTA が一堂に会する最初で最後の機会となりました。Conference では、英語教育に関する講義やワークショップ、FLTA によるプレゼン、Cultural Fair などが行われました。周辺施設を見学する時間も設けられており、Conference で知り合った他国の FLTA と交流しながら見学するなど、非常に充実した時間となりました。Cultural Fair では日本の FLTA の同期の方々と協力してブースの運営を行ないました。こうした活動を通して、改めて日本文化のプレゼンスの高さを感じました。FLTA によるプレゼンでは、幸いなことに IIE や他国の FLTA の委員の方からプレゼンターとして選出していた

だけだったので、Casper College での経験についてプレゼンをしました。緊張もありましたが、振り返ると挑戦してみてよかったと思える経験となりました。

個人的にはこの Conference は前期で最も充実していたイベントの一つでした。なぜならこの Program に応募した一つの大きな動機である、他国からの FLTA と知り合い、交流するということできたからです。渡米前から WhatsApp のグループや SNS でなど繋がりのあった FLTA もいましたが、やはり In-person での出会いというのは喜びも一入で、非常に刺激的で、有意義な時間となりました。

最後に

この FLTA Program の前半を振り返ってまず感じるのは、本当に参加することができてよかったという思いです。私はこの Program を通じて日本では得られない特別な経験や素晴らしい仲間に出会うことができました。Primary Teacher として働きながら、学生として授業を履修するということは、想像していたよりも大変で、あっという間に時間が過ぎていきました。そのような忙しい状況であったからこそ、世界各国からの FLTA の友人や日本からの FLTA 同期の存在というのは本当に大きかったと感じます。彼らとは頻りに連絡を取り合いました。特に他国からの FLTA とは頻りに連絡を取り合うことを通じて、多くの刺激や助けをもらいました。彼らとの旅行も素晴らしい思い出の一つです。

最後に、家族や友人、大学時代の恩師、そして日米教育委員会の方々など本当に多くの人に支えられて、この Program に参加することができていると改めて感じています。本当にありがとうございます。残りの期間もわずかですが、少しでも多くのことを吸収できるよう、努めたいと思います。

最終レポート

休職していた職場に復帰し、日頃の仕事に従事していると、アメリカでの約 10 ヶ月という期間は本当に存在していたのか？とついつい感じてしまいます。そのように感じてしまうのは、それだけこのプログラムへの参加が充実したものであったからだと思います。本最終レポートでは、中間レポートでは触れることができなかったことを中心にまとめていければと思います。

日本語の授業

春学期は「初級クラス」と「中級クラス」の 2 クラスを週に各 4 コマずつ、計 8 コマ担当しました。「初級クラス」については、秋学期にも初級クラスを担当していたこともあり、そこでの反省や学びを活かしながら授業を行いました。前の学期で用意した教材をベースに、それをアップデートすることで時間を効

率的に使うことができました。秋学期の試行錯誤はここで活きたように感じます。しかしながら、当然のことではありますが、生徒が変わるということは授業の内容や指導の方針などの変更が求められます。自分なりにベストは尽くしましたが、それでも自分自身の初級クラスの経験や引き出しの乏しさを感じずにはいられませんでした。

「中級クラス」に関しては、履修した生徒が秋学期に私の授業を履修していたということもあり、履修する学生のパーソナリティや躓きやすいポイントなどを授業前から把握することができていました。そのため「初級クラス」よりも指導がしやすいと感じました。授業の内容としては、普段私たちが使う、スラングといったより「リアル」な表現を交えた会話の練習を中心に行いました。その際、学生の要望もあり、教科書は使用せずに YouTube や自身の日本での体験談を教材の中心に据えました。そういった活動の他に“都道府県大使”として学生が行ってみたい日本の都道府県を1つ選択し、その選んだ場所についてプレゼンするという発表の活動を課しました。それに加えて自分の好きなものについて5分間、日本語でスピーチをするといった難易度の高い活動にも挑戦してもらいました。授業内ではできるだけ日本語を使うなどして、学生には非常に負荷をかける形にはなりました。しかしながら、そういった負荷が学生の成長に大きく寄与したと感じます。

文化大使としての動き

本プログラムでは“文化大使”としての働きが求められます。私としては以下の活動をベースに行いました。①授業内での5分ほど日本文化を伝える時間を設ける ② キャンパス内で日本文化について発表するイベントの開催 ③日常的な Japan Club の運営

①については、1つのトピックに対して Google スライド 7、8枚のものを用意し、授業で時間を設けて、それぞれのトピックについて伝えました。



Culture Event での一枚

②については、他部署と協力しながら企画の運営を行いました。大学内の学生だけでなく、近隣に住む社会人の方々にも多く来ていただき、交流の場を持つことができました。

③については、毎週1、2回1時間ほどの時間を設けて、日本文化について体験アクティビティや会話練習を実施しました。また参加者を増やすために Instagram でアカウントを開設し、活動の様子を毎回投稿するなどし、学生に向けて参加を促すなどしました。

地理的な問題や時差の都合をうまく調整することができず、渡米前に想定していたよりも活動の幅を広げることができなかったことが反省点となりました。

キャンパス内での生活

イベントの少なかった秋学期とは対照的に、春学期には、幸いにも、いくつかの学内イベントが復活しました。私はバスケットボール大会などに参加しました。イベントを通して仲良くなった友人とは授業後に外出したり、彼らの住む学生寮でゲームや映画鑑賞、パーティーなどをして時間を共にしました。こういった時間を通じて英語を話す機会を増やすことができたことで非常に有意義な時間を過ごすことができました。また、友人とのコミュニケーションの中で改めてネイティブスピーカーの話す英語の速さや省略、訛り、そしてスラングといった英語のあらゆる難しさを改めて感じました。そういった苦い経験も英語力を高める上では非常に良い経験となったと感じます。

キャンパス外での人との関わり

春学期は、キャンパス内だけでなく、キャンパス外でも多くの人と交流を持つことができましたと感じます。まず Casper で開催された社会人のフットサルリーグへ参加しました。学生時代だけでなく社会人になってからも打ち込んだ競技への参加ということで、心身共にリフレッシュすることができました。競技自体のレベルは決して高いものではありませんでしたが、リーグへの参加者が基本的に全員 Casper に住む社会人であったため、学生とはまた違ったトピックについて話す機会を得ることができました。大学内での活動があまり盛んではないぶん、こうした外部の環境に飛び込むことができたことは良かったです。

また、Casper で日本語を指導する先生のご厚意で、大学の近くに位置する Kelly Walsh High School へ不定期に訪問し、現地の高校生と交流することができました。高校生とは日本語でのやりとりや日本の高校生活とアメリカの高校生活の違いについて情報を交換するなどしました。訪問した高校では日本語は必修科目ではなく、選択科目です。そのため、彼らの学習意欲は非常に高く、日本語の運用能力も非常に高いものでした。また、高校が主催する Denver へのフィールドトリップにも参加

させていただきました。そのトリップの中で日本食レストランや日本製品を中心に販売するスーパー、そして仏教寺院を訪問しました。それぞれの訪問先で目を輝かせる高校生の姿を見て、改めて日本文化のプレゼンスの高さを感じました。

さらに、University of Wyoming が主催する教育系 Conference や Walt Disney Project といった観光系のイベントが、幸いにもこのプログラムの期間の間に Casper で開催されました。私はそういったイベントにはできるだけ参加し、コミュニティの輪を広げることに努めました。イベントへの参加を通じて顔なじみをつくり、コミュニケーションを交わす機会をつくるのに努めました。イベントではそれぞれの学校の事情についてディスカッションや小中学校の見学をすることができました。日本の学校との違いを目の当たりにすることができたのでこちらも良い経験となりました。



Futsal チームのメンバー

アメリカでの生活を通して感じたこと

このプログラムを通じてアメリカに滞在することで、やはり「日本の文化」と「アメリカの文化」の違いについて考える機会を多く得ることができたように感じます。日本にいた時は当たり前



New Year Count Down

であったことが、アメリカでは当たり前でないということはよくあります。そういった違いに直面する度に「この違和感は”文化の違い”なのか、それとも”人格”や”国民性”からくるものなのか?」と考えていました。日本にいたときは、正直なところ、このようなことをあまり考えてきませんでした。その分、様々な気づきを得ることができました。なぜこのようなことを考えていたのかについてですが、それは事ある

ごとにこのプログラムを通じて知り合った同僚や友人から「日本ではどうなの?」という質問を受けたからだと思います。こういったやり取りを通じていかに自分が感覚的に過ごしていたのかということを感じ、そういった感覚を改めたいと考えたのです。

このプログラムの一つの魅力は他国の FLTA と知り合い、お互いの国のことについて議論を交わす機会を得ることができる点であると考えます。そういった機会ですべての日本について話をするのができれば、より一層の充実感を得られると思います。そういった機会を得るのに、他国の FLTA 達を誘って旅行に行くことをお勧めします。また、それぞれの州によって文化も全く異なるので、他の FLTA とお互いの現地での生活について話をするのはとても楽しかったです。



Wyoming Sign

最後に

中間レポートでも記載しましたが、本当に多くの方に支えていただいたおかげで、なんとかこの FLTA Program を終了することができたと感じています。世界中からの素敵な同期に恵まれ、非常に有意義な時間を過ごすことができました。今後はこの素晴らしい経験を還元するとともに、更なる研鑽を積んでいきたいと考えています。貴重な機会をいただき、本当にありがとうございました。



Wyoming Sign

フルブライト語学アシスタントプログラム (FLTA)

2022 年度 参加者レポート

桑田裕理 Lincoln University, Lincoln University, PA

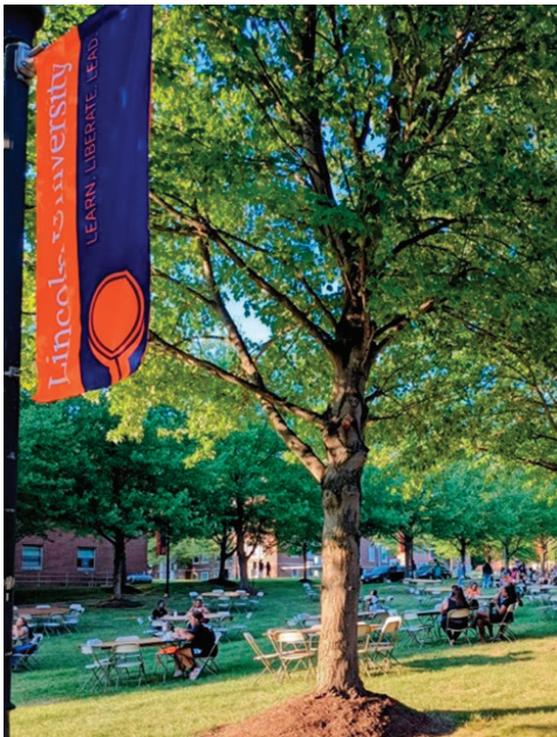
中間レポート

派遣先のリンカーン大学は、東海岸に位置するフィラデルフィアから車で約1時間半のところにあります。人口約6千人のOxfordという小さな町の隣にひっそりとキャンパスがあり、Lincoln Universityがこの小さなコミュニティの町名となっています。このレポートでは、大きく5つ(派遣先の環境、TAの仕事、履修した授業、学生生活、Fulbrighter)に分けて書きたいと思います。

派遣先の環境

・大学

Lincoln Universityは、Historically Black Colleges and Universities(通称:HBCU)の一つで、学生数は2000名程度の小規模大学です。現在もおよそ85%がアフリカ系アメリカ人の学生で、次いでヒスパニック系の学生が多いため、キャンパスで白人の学生を見かけることは稀です。約半年が経過しましたが、アジア系の方との出会いは教授お二人のみでした。秋学期が始まる前は、歩いていると「日本人



キャンパスの夏の様子

TAでしょ?」と学生から声をかけられることが多々あり、目立っていること、注目度が高いことを日々感じていました。

・周囲の環境

キャンパスの徒歩圏内には、アーミッシュの小さなマーケットや郵便局を除いて大きな施設はありません。しかし、少し足を延ばせばKennett Squareという町があり、レストランやお店が並ぶ通りへ行くことができます。この町はマッシュルーム栽培が盛んで、「The Mushroom Capital of the World」という名の通り、場所によっては車で通り過ぎるだけで、車内が強烈なマッシュルームの匂いに包まれます。キャンパス周辺の交通手段は、近隣の町同士を繋ぐ路線バスのみで、平日のみ運行されています。生活必需品は運が良ければ大学のパントリーで無料で手に入りますが、買い物が必要なときはこの路線バスで隣町へ買い物に行っています。

・サポート

車がないので不便に感じることも多いですが、大学や周囲の方々のご助力があり、なんとか生活できています。大学は、月に一度、留学生の買い物のためにバスを提供くださり、職員の方々からも様々な面でご支援をいただいています。特に、大学のFLTAのAdvisorはイベントがあるとお家に招待してくださったり、よく出先まで送迎してくださったりして、まさに「おかげさまで」という感謝の気持ちでいっぱいです。



学食でのイベントにて

TAの仕事

・授業

リンカーン大学には日本語を指導する教授がいないため、Main Teacherとして一人で日本語を教えています。秋学期は、初級の授業を週4コマ（各50分）、オフィスアワーを1コマ担当し、6名の学生が履修してくれました。4コマ中1コマは「日本語を実用的に使う」ことが目的のLabという科目でした。Advisorからの助言を受け、学期始めのLabの数は「文化を通して日本を知る、楽しむ」ことを重点に置きました。書道体験を行った際には、レクチャーを最小限にとどめ、書く文字を自由に選んでもらい、学生との関係づくりを心がけました。学生の自己表現の時間を多く設けることで、彼らの興味関心を知ることができ、その後の授業に活かすことができました。しかしその後は、出席率の低さという問題に頭を抱えました。履修人数が少ないことに加え、1限の授業だったので、遅刻や欠席が目立ちました。出席率の低さに関しては渡米前から話を伺っていましたが、いざ直面すると落ち込みました。他のTAと一緒に対策や授業の工夫を考えたり、教授陣や友人に助言を求めたり、学生と話をしたりして改善に努めましたが、秋学期は大幅な改善には至りませんでした。



新年会にて

・日本語クラブ

こちらは、2週間に1度の頻度で開催し、折り紙や日本語のゲームをしたり、解説を入れながらアニメを観たりなどしました。日本語クラブで好評だったのは、日本人大学生とのLanguage Exchangeです。日本語教授法を学んでいる日本の学生と私の学生をZoomで繋ぎ、日本語で会話練習をしたり、英語でお互いの文化についてカジュアルに意見交換をしたりしました。他にも、近隣で日本のイベントが開催された際には、Advisorに送迎を頼み、課外授業として休日に、学生をイベントへ連れて行くこともしました。日本人会が主催の新年会へ連れて行った際には、つきたてのお餅をきな粉で初めて食べたり、授業で学んだフレーズを実際に聞いたり使ったりして、モチベーション向上に繋がったようでした。

履修した授業

秋学期は、English Composition I と African American Experience という授業を履修しました。前者は、特定のライティング技法が使用された課題を事前に読み、ディスカッション、その技法を用いてエッセイを書くというものでした。例を挙げると、言葉の定義方法、人物や場所の記述、視点の設定やバランス、因果関係を記述する際のコツなどを学びました。毎回授業のラスト10分は、文法のレクチャーの時間になっており、文法的知識が補われるように設計されていました。教授は学生の興味関心を大切にされていて、Hip-Hopやドラッグ問題、Black Lives Matter、有名人などをテーマにディスカッションが行われました。そのため、ライティング技法と同程度、アメリカ社会についての理解も深まりました。

後者のAfrican American Experienceの授業は、必修科目の一つとして位置づけられています。レクチャーの中心テーマは、奴隷貿易がアフリカに及ぼした影響、アメリカ経済の発展と奴隷の関係性、アフリカ系アメリカ人の伝統的な家族観やコミュニティ内で重視されている価値観、黒人音楽から考察できるアフリカ系アメリカ人が直面している問題などでした。Roots (2016) というTVシリーズの一部を授業で観るという回があり、奴隷制の凄惨な映像に、教授も学生も涙したこともありました。歴史を黒人目線で概観し再考する経験は、日本で学んできた私の視野を広げてくれただけでなく、BLMなどの現在の出来事を理解しようとする上で、大変有意義なものでした。

学生生活

・住まい

FLTAは、大学が所有するシェアハウスに住むことになっています。大学の敷地内ではありませんが、キャンパスの目の前なので、自分のオフィスまで徒歩5分とアクセスが良いです。今年度は日本以外に、コロンビア、スペイン、フランス、モロッコからFLTAが派遣されており、一軒家で共同生活を送っています。様々な面で異なる5名が、一つ屋根の下で暮らすことは容易ではありません。生活音、共用物、掃除、来客など、習慣や文化の違いによる摩擦が生じました。しかし、「全員が心地よく過ごせるように」という目標は一致しているので、お互いの妥協を探り、ルールを決め、それを守ることで、シェアハウス生活が成り立っています。

・食事

有り難いことに、大学からの支給内容に食事も含まれているため、インフレでもお金のことを気にせずに食事ができています。Wellness Center内の飲食店とDining Hallの2箇所が利用でき、どちらもビュッフェ形式となっています。前者

は、アメリカ料理とメキシコ料理が主で、中国料理が時々提供されます。朝食は軽食で、昼食と夕食はメインディッシュ類に加え、毎回サラダバーやフルーツがあるので、大変助かっています。後者では、メキシコ料理のプリトーが提供されており、食材を自由に選び、自分好みのものを作ることができます。シェアハウスに充実したキッチンがありますが、学食の料理に満足しているため、あまり料理はしていません。バラエティ豊かな学食の料理に、毎日支えてもらっています。



Dining Hall のビュッフェ

・緊急事態 (余談)

米国到着 4 日後に新型コロナウイルスに罹り、新生活は波乱の幕開けでした。学期開始前でキャンパスにスタッフはおらず、同僚の FLTA は数日後に到着を予定しており、大学の Primary Advisor はスペインにいるという状況でした。長旅や心労も影響したためか、症状が重く、起き上がるのも厳しい状態でした。しかし、常備薬・救急対応を準備していたこと、米国で見え人になってくださる日本人の方とコミュニケーションをしっかりとっていたこと、日程に余裕をもって渡米日を選択していたことが功を奏し、冷静に対処することができました。大学への連絡やコロナ対応などのやりとりは見え人の方を頼り、手続きや授業準備等を済ませて、なんとか授業初日に参加できました。見え人の方や大学のサポート、隔離期間中の同僚 FLTA の支えには、心から感謝しています。

Fulbrighter

FLTA の方々とは公式に 2 回交流する機会がありました。出発前オリエンテーションと、中間カンファレンスです。前者はオンラインで開催され、米国留学全般に関する知識や FLTA としての心構えを学びました。後者は、念願の対面形式で、ワシントン D.C. で実施されました。51 ヶ国から 374 の言語を話す FLTA が一堂に会し、言語や文化、教育について学び、楽しく充実した時間を過ごしました。その他、アメリカ人のフルブライトターのパーティーに参加し、彼らの熱意に感銘を受けたり、Uber の運転手さんの娘さんが偶然 FLTA で、幾度かご厚意に助けられたりと、書き切れないほど素敵な出会いが沢山ありました。

応募から現在に至るまで、FLTA 経験者からは折に触れて助言を頂き、同僚の FLTA、日本人フルブライトターとは励まし合い、ここまで来られました。IIE やフルブライトオフィスなど影で支えてくださる方々のサポートにも感謝しています。残り約 2 ヶ月間も、悔いのないように日々を過ごしたいと思います。



Mid-Year Conference の Japan ブースにて

最終レポート

中間レポートでは、派遣先の環境や秋学期の様子を中心に お伝えしました。最終レポートでは、春学期に関して以下の 5 つ (① TA の仕事、②受講した授業、③学生生活、④前向きにポジティブに、⑤経験を振り返って) を記したいと思います。FLTA として米国で過ごした後半は、予想外の出来事が次々と起こり、前半よりも更に濃い日々となりました。

1. TA の仕事について

・授業

前学期同様、日本語の授業を一人で担当しました。秋学期の学生をほぼそのまま引き継ぎ、学生 4 名が初級 II を履修し

ました。通常授業を週3コマ、Labを1コマ、その他補習やオフィスアワーを通じて日本語の指導を行いました。前学期は出席率の低さに頭を抱えていましたが、教授陣に助言を頂いたり、授業の開始時間やレクチャー方法を変更したりするなど、様々な工夫を経て少し改善することができました。その中で、フィードバックを増やしたことが最も効果的でした。出席率や提出物の状況を知らせるメールを定期的を送り、現状把握・理想とする最終成績までの逆算・軌道修正を促しました。時間の経過と共に信頼関係も徐々に構築され、やる気なかった学生が「先生ー！最近勉強頑張ってるよ！ノート見て見て！」と言うようになるなど前学期からの成長が見られました。ひらがなとカタカナがスラスラと読めるようになり、日本語という厳しくも美しい言語の大海原へ楽しそうに繰り出していく姿に目頭が熱くなってしまいました。

・日本語クラブ

今学期は大きなイベントが三つありました。一つ目は、日本語フィラコンという州内の高校生向けの日本語・日本文化コンテストです。近隣に大学生向けのコンテストがなかったので、学生には運営のサポートを行なってもらいました。ゲーム形式やチーム戦もある楽しいコンテストで、高校生の真剣な眼差しや情熱には胸を打たれました。日本へのパッション溢れるキラキラとした参加者の姿は大変眩しく、私と学生の日本語に対する熱意も自然と高まったイベントでした。二つ目は、フィラデルフィア桜祭りです。当日学生が来られなくなったので、私と知り合いの日本人で訪れ、写真や動画を後日シェアしました。日本関係の店や催し物が多くあり、遠く離れたこの地で日本が多くの人々に愛されていることに胸が温かくなった春の一日でした。三つ目は、学内で開催したJapan Nightです。来場者へ提供する手巻き寿司とお味噌汁約40名分を私と学生で手作りしました。日本に住む黒人のインタビュー動画を流しながらおしゃべりしつつ、学生と大量の巻寿司を作った経験はとても良い思い出です。そのほか学期末には、日本の家庭料理を一通り作って食べ、ざっくばらんに話をするお別れ会を開きました。日本について紹介する傍ら私自身も日本の魅



日本語フィラコンの一幕

力を再発見することが多々あり、クラブの活動から私も多くの気づきと元気をもらいました。



学生と大量に作った手巻き寿司の一部

2. 学生として受講した授業について

各学期に授業を2つ選択するのが原則で、春学期は教授やアドバイザーに交渉し、3科目授業を受けさせていただきました。帰国後は民間企業から教育にアプローチしたいという思いが湧き始めたので、それを念頭に授業を選択し受講しました。

1. Intro to Computer Programming (週3回各50分)

Pythonの基礎を学ぶコースでした。授業進度が早かったのですが、作り込まれたスライドと頻繁に設けられる質疑応答、HBCU愛溢れる教授の人柄のおかげで楽しんで授業が受けられました。

2. Business Research Methods (週2回各90分)

R言語でデータのグラフ化を主に学ぶ上級クラスでした。こちらは学生の出席率が悪く、授業がキャンセルになることが度々起こりました。当初の授業数から少し減りましたが、R言語の基礎に触れることができました。

3. College Algebra (週3回各50分、聴講生として)

複素数、二次方程式、関数全般など、日本の高校数学を学ぶコースでした。数学関係の英単語に当初は苦労しましたが、高校時代の記憶に助けられました。課題はオンラインの学習システムで出され、解答と同時に正誤判定が表示され、必要であれば丁寧な模範解答が見られる仕組みになっていました。間違えた問題を瞬時に復習できるので、このようなシステムが日本の多くの学校現場で導入されたら良いなと思っています。

3. 学生生活について

・シェアハウス生活

中間レポートの記載にある通り、一軒家で4カ国のFLTAの方々と共同生活をしていました。性格や文化の違いなどで衝突することもありましたが、その度に話し合いの機会を設け相互理解に努めていました。しかし、家の構造や築年数の関係もあり、生活音に関しては解決するのが困難な面もありました。様々な策を試み、大学へ相談した結果、引越しがベストだという結論に至り、途中で学内の空き部屋に移りました。引っ越し後は全員が以前よりもハッピーになったので、勇気を出して大きな決断をして良かったなと思います。話し合いやディスカッションではFLTAは各々弁が立ち、英語力やコミュニケーション能力において見習うべき点が多くありました。仕事と私生活を通して同僚達から多くの学びを吸収することができたのは大変恵まれていました。



アドバイザーと同僚FLTAと
(残念ながらモロッコFLTAも写った公式の写真がありませんでした...)

・イベントでの学び

Japan Nightというイベントを学内で主催した際、日本人のゲストスピーカーが学生を心理的に傷つけてしまうというアクシデントがありました。ゲスト講演で使用された映像や資料の一部から「ゲストは黒人文化を揶揄している」と学生は受け取りました。文化的知識・想像力・多角的視点で物事を考えることの大切さを身をもって学ぶとともに、講演内容やゲストの意図は決してそのようなものではなかったので大変心が痛みました。その後はイベントの主催者として様々な対応に追われる中で、多文化社会で育ち学んできたコロンビア、フランス、モロッコ、スペインの同僚FLTA達の卓識に救われることが多々ありました。フルブライトプログラムは世界中から様々なバックグラウンドを持った人々が参加するプログラムなので、このように各国FLTAの深い知見を交え、成長することができる環境に身を置くことができます。

・Shooting

春学期も終わろうとしていた4月半ばにキャンパス内でShootingがありました。2名が撃たれましたが、致命傷でなかったのが不幸中の幸いでした。当日は、Spring Flingと呼ばれる恒例行事が開催中で、学外からの若者も加わって大変賑わっていました。事件当時私はキャンパス内の家におり、数時間後にスマホを見て事件のことを知りました。銃社会にいることは百も承知でしたが、翌日から通常通り授業が始まり、犯人も中々捕まらず、ニュースで大きく報道されない現実を目の当たりにして、このような事件はアメリカでは日常の一部なのだ和理解すると共にもやもやとした消化しきれない気持ちになりました。派遣前のオリエンテーションで、銃撃が起こった際の対処法の話がありましたが、メインティーチャーとして教えるFLTAはいざという時に学生を守れるよう、非常時の対応を大学側と話し合っておく必要があると感じました。

4. 前向きにポジティブに

上記の3つの大きな出来事に加え、慣れない環境でティーチング業務と学業に励み、日々気を張っていたと振り返って思えます。しかし、ストレスに負けず心から楽しんでプログラムを終えることができました。それは自然溢れる環境と周囲の人々のおかげということもありますが、ここではその他の要因を考察したいと思います。

1. 大学のカウンセリングセンターの活用

これは、上記3つの出来事を乗り越える上で欠かせないものでした。イベント対応に追われていた時期は複雑な状況で苦しい日々を送っていたため、特にカウンセラーの存在が励みになりました。シェアハウス生活相談の件で一度利用していたので、イベントの件では二度目の利用でした。騒動の対応という重大な局面において、面識があり状況を瞬時に理解してくれるカウンセラーの存在があったのは恵まれていました。今後派遣予定のFLTAは、センターの雰囲気や利用法を把握するため、あるいは、ガス抜きやメンタルヘルス維持のために一度足を運んでみるのはいかがでしょうか。

2. 身体を動かしてリフレッシュ

私はストレス解消として主にランニングをしていました。特にキャンパスの外周を走るのが好きで、運動後のスッキリとした感覚と自然がもたらすリラックス効果で、走った後は自ずと前向きな気持ちになっていました。冬は日が暮れるのが早く、本格的な冬到来後はジムで身体を動かしたり、ヨガクラスへ参加したりしていました。2022年から2023年の冬は降雪量が少なく、大寒波が押し寄せた時は冬休み中でキャンパスにいなかったのが幸運でした。キャンパスの周りに広がるどこまでも続くトウモロコシ畑、放牧されている牛や馬、広大な空や

美しい夕焼け、秋の紅葉の景色は今でも思い出し、当時の環境をととても恋しく思います。



ランニングコースの風景

3. 積極的に外へ

マンモス校や都会へ派遣された FLTA は、娯楽や憩いの場、出会いが多くあるかと思いますが、私の派遣先ではほぼありませんでした。そのため、気分転換をしたり、学外へと人間関係を広げたり、視野を広げたりするために、活動的になることを心がけていました。特に長期休暇中は各州に散らばる各国 FLTA のところへ遊びに行き、その州とその FLTA の国や文化について詳しくなって帰ってきました。世界 51 国から 374 の言語を話す FLTA が同プログラムに参加し、各地で私のように奮闘していると思うと離れていてもパワーをもらえました。多くの参加者が書いている通り、フルブライターと呼ばれる参加者同士の繋がりは大きな魅力であり一生の宝物です。



ナイアガラの滝にてインドネシアの FLTA と

5. 経験を振り返って

私のプログラムは、8月15日が開始日、5月15日が終了日に設定されていました。終了日から30日は米国に滞在できる仕組みなので、国内旅行とメキシコ旅行をしてから日本へ帰国しました。参加前には想像できなかった濃い9ヶ月間を過ごし、振り返ると様々な感情が溢れ出てきます。このレポートにはとても書ききれないので、ここでは「感謝」に絞らせてください。

このプログラムに合格した際、私は現職の休職制度が使えなかったため、私は退職という手続きを踏みました。この決断に助言や意見をくださった方々、受け入れてくださった方々、後押ししてくださった方々がいなければ、入り口にさえ立っていませんでした。本当に感謝してもきれません。また、アメリカ生活では沢山の素敵な人に出会い、多くの人に助けいただきました。特に、現地で活躍される日本人の先輩方の背中は大変頼もしく憧れの念を抱いていました。また、遠く離れた日本から心配して頻繁に連絡をくれ、元気や勇気をくれた家族・親戚・友人の存在も大きなものでした。さらに、フルブライトプログラムは日米両政府が提供しているので、見えないところで多くの方々が支えてくださっていることと思います。寄付をしてくださっている方など多くの方々の支えがあってプログラムを終えることができました。この場をお借りして感謝申し上げます。

滞在中はコンフォートゾーン、ラーニングゾーンを越えて、パニックゾーンに足を踏み入れることも度々あったので、経験を自身の中で咀嚼しきれていない部分・俯瞰的に見られていない部分もまだあります。歳月を重ねるごとに理解が追いつくかもしれませんが、今間違いなく言えるのは、人生の糧となる貴重な経験だったということです。最後に、中間カンファレンス中に訪れた National Museum of African American History and Culture の展示の一部を引用させていただきます。"The past is of value only as it aids in understanding the present; and an understanding of the facts of the problem... is the first step toward its solution. – Chicago Commission on race relations" 過去の経験をどう活かせるか・還元できるかという視点を忘れずに、これからも精進してまいります。